南関東地域直下の地震断層モデル想定の考え方

中央防災会議地震防災対策強化地域指定専門委員会検討報告(平成 4 年)から抜粋したものを下記に示す。

「南関東地域直下の地震のタイプを大きく分けると、ア）地殻内の活断層で発生するもの、イ」プレート境界面近くで発生するものとが考えられる。

このうち、ア）のタイプの地震については、個々の活断層に着目するとその再来期間は数百年から数千年と長いが、南関東地域に存在する活断層全体として考えれば、その発生の切迫性を判断するのは困難であるため、現段階では、当面想定すべき地震の地震モデルを明らかにすることは困難である。

一方、イ）のタイプの地震については、南関東地域の地震発生の過去の状況から考えて、この地域では今後 100 年から 200 年先に発生する可能性が高いと考えられる相模トラフ沿いの規模の大きな地震に先立って、プレートの潜り込みによって蓄積された歪のエネルギーの一部がいくつかのマグニチュード 7 程度の地震として放出される可能性が高いと推定される。関東大地震の発生後、既に 70 年が経過していることを考慮すると、その切迫性が高まってくることは疑いなく、次の相模トラフ沿いの規模の大きな地震が発生するまでの間に、マグニチュード 7 程度の規模のこのタイプの地震が数個発生することが予想される。このタイプの地震は、プレート境界面近くのどこで発生するか特定することができないため、自身の発生により著しい被害を生じるおそれのある地域の範囲を求めるための地震モデルとして、このタイプの地震が発生する可能性のある領域を包含するよう、南関東地域に潜り込むフィリピン海プレートとユーラシアプレートの境界面を近似的に設定し、その上にほぼ等分布にマグニチュード 7 となる大きさで 19 個の地震断層を設定した。」

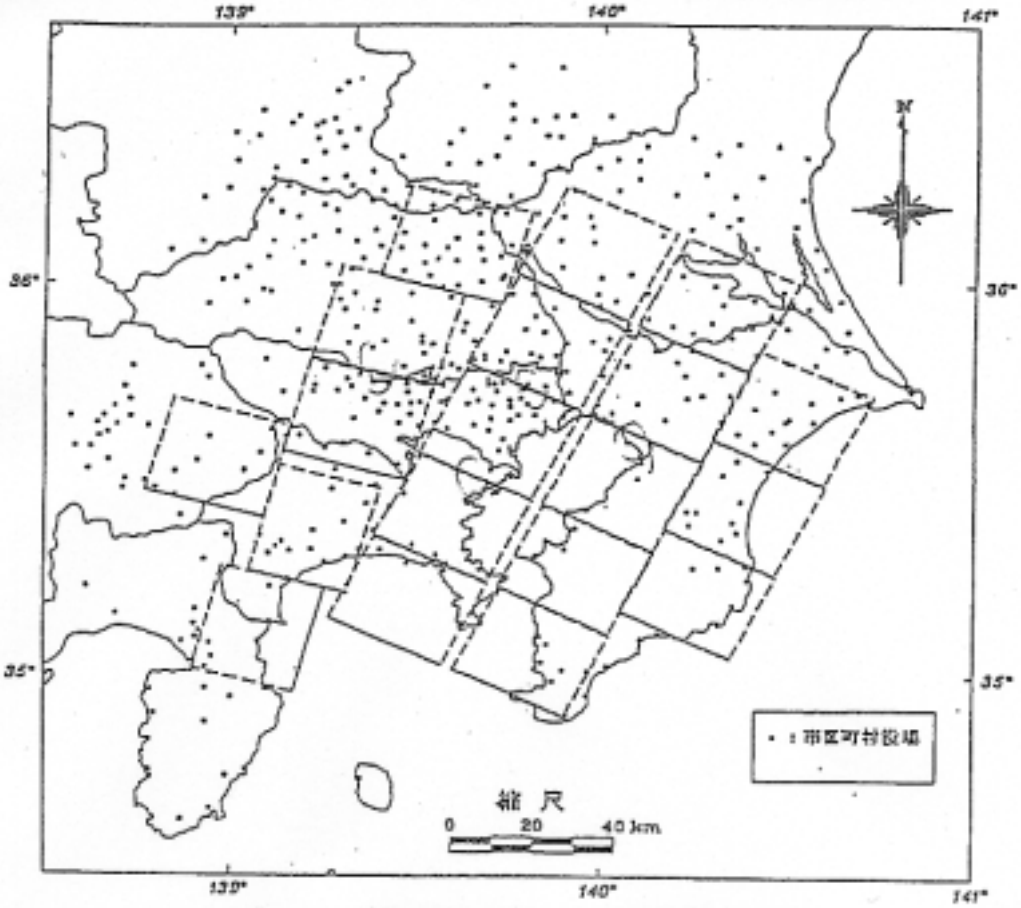

図 5.2　南関東地域直下の地震断層モデル